島の復興 ぼくらが記録

宮城県気仙沼市の沖合に浮かぶ「大島」で、島に１校しかない大島中学校の生徒が東日本大震災後に写真サークルをつくって一眼レフを手に島内を駆け回り、古里が立ち直っていく様子を撮り続けている。名古屋市瑞穂区の医療系支援団体「日本メディカルオアシス研究学会」の援助がきっかけで、作品は名古屋でも２月１日から展示する。（神保美希）

気仙沼・大島中で写真サークル

メンバーは一、二年の九人。浜のがれきの片付けなど復興作業のほか、授業中の同級生らの姿もファインダーに収める。屋外授業の水産活動では、漁船の上で漁の手伝いをする仲間をパチリ。手前には水揚げしたウニを置き、関心を引く構図づくりにまでこだわる。震災前から所属していたバレーボール部などと掛け持ちだ。

震災後の島の姿を撮り続ける写真サークルの畠山翔汰君ら＝宮城県気仙沼市の大島中で（福沢和義撮影）

瑞穂区の団体 機材提供 授業や文化祭、1000枚にも

作品は校舎内の掲示板で展示。定期的に入れ替え、今月中旬には文化祭の様子を撮影した十七枚を飾った。手をつないでみんなで歌ったり、劇をしたりする姿。「三月にはもう大島にはいられねえと思ったけど、文化祭ができてよかった」と一年生で部長を務める畠山翔汰君（一三）。

震災後に大島に支援物資を運び続けている日本メディカルオアシス研究学会は五月、感性豊かな子どもの目線で復興を記録した写真展ができないかと大島中に提案。一眼レフ三台とコンパクトカメラ二台を贈った。

さらに理事長の加納隆さん（六九）が島を訪れるたび、生徒たちに「物語を想像しながら撮りなさい」と撮影手法を指導してきた。畠山君は「撮り続けるとだんだんと面白くなってきた」と話す。撮りためた作品は千枚にも届く。

大島中は全校生徒八十八人。津波で命を落とした生徒はいなかったが、四十一人が家を失い、一人は親をなくした。だが一年の片山佳介君（一三）は「がれき撤去で浜がきれいになっていく姿を写真を通して見れば、少しずつでも大島が立ち直る様子が分かる」と話す。

名古屋の作品展会場は瑞穂区瑞穂通の丸美産業の一階展示スペースで、入場無料。メンバーのうち一年生五人が今月二十三～二十六日に瑞穂区を訪れ、汐路中の生徒と交流する。